

トマトかいよう病の発生に注意しましょう。

近年、トマトかいよう病の発生が増えています。本病は細菌（*Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis*）による病害で、芽（葉）かきや誘引などの管理作業によってできた傷口から侵入します。発生ほ場では、発病株から健全株への伝染を防ぐため、下記の点に留意しましょう。



写真1 下葉の周縁がしおれ、後に乾燥して上方に巻き上がり、葉脈の間が黄化し小葉全体が褐変枯死する。



写真2 茎や葉柄の維管束が褐変する。



写真3 病徴が進むと髓部も褐変して粉状となり空洞となる。



写真4 果実の表面には、径2～3mmで白く縁取られた鳥の目状の斑点を形成する。

【防除対策】

- (1) 循環扇や暖房機利用による通風を行い、植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- (2) カスミンボルドーや銅シン水剤を散布し、予防に努める。
- (3) 発病が疑われる場合には、簡易診断キット（Agdia社製 ImmunoStrip等）を活用し、早期発見に努める。
- (4) 発病株は速やかに抜き取り処分する。発病が疑われる株の管理作業は、他の株と別にするか最後に行く。
- (5) 曇雨天時や早朝等、茎葉が濡れている時間に摘芽や摘葉等の管理作業は行わない。
- (6) 摘葉、摘果にハサミを使用する場合には、ハサミの刃をこまめに消毒する。
- (7) 発生ほ場では栽培終了後に土壌消毒を実施する。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。
また、当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。

（TEL 028-626-3086）